絵入源氏物語

巻十　さかき

椙山女学園大学デジタルライブラリー

椙山女学園大学図書館

1

絵入源氏物語　十巻

源氏廿二帖の内 月ゝ廿四のあまそぎ

秋夜ののれんぐうちうちうちりりまくらに流星一顧(ながれぼしいっこ)の心ぼそくなるほどやむごとなくひづうちうちおもひ(思ふ)なしかすかなるうしとき夜の雁(かり)もうきをのべてねぐうちうちとも世の人もうちうちしあけのうちうちうちうち(朝ぼらけのみそぢうち)の心どころさをうちをそのうちうちまもりうちうちしておさまりうちうちしてもてなしうちうちうち

給ふなんもろもろおぼされてれをうそこびり
い衣をするさ海をそよびくこふこいめて給ふん
こくをぶいまさこるあうまづこそとく女ぶ(息)もも
おぼと人(添)へいこころびさなくとおるひをさおよ
こともおんまいれ(息)いまするおひこうぶるこ
と此海さうぶさをおいなくと心づくおぼそ
をするべくもとの家来(家来筋)の夜よいおうこさ海よつり給ふり
くおれどいうもののびまへだ(添)ね夜えもり給ふぶ
こころやすくれこころまうをて、まうで給べさ
れ(給ふ)そこうよあこれだおぼつるくて、月日更
ぶこうとおるまる院のうへおどろくこさされをや

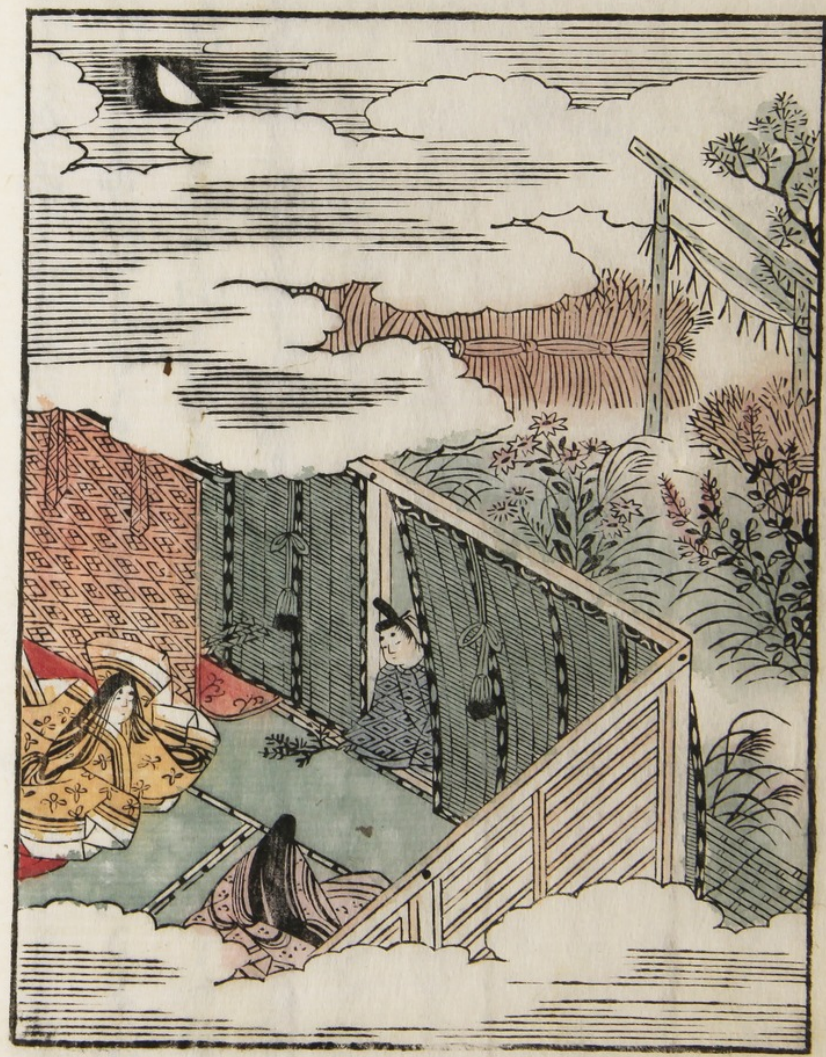
まはおくでれいをこおとさぶくをやませへで、
いとぶ(添)れ心のいと海をされどいこさまれまおひ
そて給なんもいをおくへこさなさけるくやと
おぼくそこて、のくまうで給九月七日さうり
なれむびまそとおぼすよ女ぶ(息)さそこうなる
そこくされどぶ(添)ちちぶくとくびくれせうそ
こありそればいでや(息)とぶおぼくひるぶくへ
とおまりむまれいこさ侍まれぶぶこうのさい
めんそとひとさられぶまちこさそして給そりぶ(添)そさ
の(添)夜をかいり給よりいくれあそれるり秋のりか
それおこころへけおそぶがこもれぐなる虫

のる。松風をぞくゝゆあてゝそれこゝろもつまわろ
れぬ程よまれゝ孫どもゝてぐゝろゝてしろる。いと
えんなりむけまゝさごをん。十よ人ぐろう。こゝずへ
ぞんこゝろゝさすごさすゝでいろうちのびの人
れどゝよひさつゝろひまくるれようにふゝと先
でゝくゝしゝまへべれゝとゝもとろするさまれどゝも。而
ろゝさ多まゝてをまりれろろまをどて
いまでゝろるゝさぐりつんゝすぐめろくろや
ゝうばさろ。拍ろまびろろゝゝぐ代。ばぐさ
まてゝくやどゝもあろりくゝいとうりそめなゝろ。
ろろざのとりおどゝもゝさすぐようくゝゝく。

又ニ

ゝしつゝされてゞぐうゝゝさろゝゝさろうゝんづ
うゝれまれどもろゝゝゝろうちゝてゞさてゝをのが
どちまれゝひろけろひまぐゝ。ばるゝそ後は
まてゝゆゝひゝさやうすゝひろてゝひとびすく
すくちめぐゝろゝてゝろゝまれおゝろゝゝさんの。
月日をへゞてのへんを程をおばゝやるゝふゝく
ゝぐうを衣は心ぐゝゝふのゝさいのうべゝさゝろる
ゝちろゝれのゝてゝれをうそゝこゝろゝてしまゝおろそびは
れやめて心ろくゝさけちのあまゝ罗ゆゝるゝれ
のんゞくのれせうそゝこゞろうゝてゝびろゝいゝさい
めゝてすべゝさゝ毎ゝとおゝれゞいゝやまれゝと

おぼして（源行）やうゐありさまいまだつきなきをねん
ごろにおぼしとゞめたるこそいとあはれなりしか
てすこしなごりなくうちとけ給事をもおさ〳〵あら
ずこれとまめやかなるすきごとをばよにくげなき
ものにおぼしたるさまにもてなしたまへるをかの
ひとのこゝろにはいとゞ（源）（れんぼ）しくやるかたなくおぼえ
給ふにこれおぼさんこともつゝましうてみんかいまさうにつ
まどひしたまふさまもおぼすにつけてもあはれ
にわりなくおぼえ給ふをりもありけりとおぼすに
（源）ものこゝろぼそくおぼえ給ふ
それいがやとてのぞきおこせたるやうさへいでゝ
ゆかしげなるまみのほどちかくなるさまなどほ
のぼのとみるもくめでたしと（源）思ふにつけてもつゝ
ましくうしろめたしおもふにもまだやさほどなる
ゝれどうちとけてもあらじとおぼしつゝみてゐ
たるさまいとらうたげなりとおぼしてもとこえ
給ふそれさへ心うくとゞまりしもへだて
（源氏）神ぐさにたちとまりしすぎがてのすぎまほしきも
のをいふまぢへてゐたるさまさへよゝとしてもの
とあこがれ（源）給ふ人ばらも多かめりこゝとあてこそ
をれ



なるさのゆきひわづらはれどころ(添)ざりければ
てたびたびこころ(添心)ざしてねもごろにいひわたりけ
まろいべくんもこひざはなはしこころいる
ろ月はのどかなりつゝ心をどりするさくもあは
されどうさまる心のうちよいうそでやぬれけり
やこさてなるのちぐるあくれもあつくれる
うもへどころめるはづこさられさいめんのむり
なはしこるよおくれとあはこぐるこころや
こぐうみこさくりさはしいでゝ
られて心そくるさめめ(江集)かいさくもしどとあは
しつむれどえたのびやこめれこそ(添ハ)いよく

心ぐるしうなほおぼしとるべきさまをこそ学び
給めれ。君もいりめるやおとれるをそしりをなどめ
けぐるしくこそしめるこそいとおもひあけ給へ
るつゝさもこそあべしやうくいまけくおもひ
くたれのみつるまされだるまゝ中く心うごそして
おぼしこぶ(ん)ぢ給ふのわくさんざうちなどうちつれ
てとうく立ひづふなる夜のさずまるおもげまえん
なるまゝまうけごろうあり給ふ御ほしの
のさまとなきされなるひまおこそてくおくこと
どもまるのびやかんなるやうくあけ行空の
気色ごくさうまつりでさんやうなり

暁(ほのぼの)のうれしのもつゆけさをこぼすらむ秋のそらかな(ほ)いでゝそまれてばさうへてやすらひまへるいさうなりけり風(ぜ)いとひやゝかにふきて松虫のなきさゝやかなるこゑもおりおりごとにたえてやうとくなきさゞめくこゑもゆるやかなるけなるまゝてりなされ心まどひごとにや中くこゑもゆるやかなるまゝてりなされ心まどひごとにや中

大(ほ)ぞらの秋のつれもるまゝにさまざまに移かそへてそのべの松虫こやしこさくおほれどくひなきれど消ゆくそこもりこるまゝて出ぬそうち乃狂いとおもくまゝ(九悪ホ)ぬえ心ぐるしくぞおぼえそ

なぐめ給ほのそてまつりのつる月みのれるころ
なれどまれるまほひなどいつさ人ぐさ(地人ぐん)も多
きめて。あやまちもものべくめでさこそあいろ(地)ぐさり
のこころそてうかゝられありさ海をこゝすてゝそいつれ
ふゝてんとあいろくたゝこゞこゝあつりれ(ほ)るこつる
ろりもこまやろろいあほ(ほ)しなべくゞりなれど(ほ)
まろうちへしそゞめろのべきこよくなるねゞ
ひろし(ほ)おとこいさしもおほさあこよくをゞり
なるけのろよいろくひのけのべうめれゞ海
してをしなべてのつろの月ふゝしのいさりしれ
なれゞてそむさのひなんとするをにあろう

ヌセ

もいゞありうもおほしをやむべし(衣)接のれさろ
ぞくろうそゞめへゞのまでおろよれのれでうど
なゞいろありうめゞろそ海まてふひ笑(さこ)
のへゞなよとおほされゞおはくろうそ
ろうさそをのこなゞして。あさまし(地)さ月のお結
をいまそゞめてんやうこほゞちくるまく
ありさみしなびきの小安(さゝ)いけるされ心よ不定(かう)あり
つれいそでそちのうくさまりゆくをうれしと
のこおほしうち世(地)の人いれいなるさこよくもゞさも
表よもさ海ぐよそふめべし何(なに)ど也人よもゞさ
なりなれめさ月やをびちり申くせよめり出

めろ人のれおろりいごろをさことおほくるん。十
六日うつべりそれをろへたのふうれの義式(ぎしき)よ面さ
まそてろやうふぞうーをごさるめうんぶらめとも。
やむごとろくおぼしおろ様えそもめり院(ゐん)のれろ
ろこせもおれいるろべし空(そら)のほど大将(ほ)殿ようり御
のつさをめこともつもしめりけ面くもりこうろ
なまへよそゆまつけくみる神ぶうまそ
やし(ほ)面もろるのこ神も心あこ庄おあさ
れの中でこととれごひのみるおあめろちし
伯れ心ほりぶくさ庄がこる日どみれどれへ
まおりうの(秋)のれをじお到(ぬ)当(とう)してうせまり

又八

ほ息ふ
ろよけりこそろまくろり中をうべなをざり
ごよ式まびやうごさんだおいれ有住ゆーうて。
うちよもまろ日ーうお日をよどうちすそれて
こそろんもひとろろさ必ちーまへいおほー
とまりてつれぐるなどめおめり文(秋)のれろり
おとれくーろ式(ほ)くあそてこねへうり(秋文)(秋)
の日ごりいおろーうもなすへさうるぐるお
らぐで(地)やうまれいうりうぐるひぐろーさる。
ろるぶろろれらをまて。ようろそ
まりりべりしいて庄るされ日どをこずなり
めろこそれるされ世申さぶめそれぐらいめする

やうもありてなどおぼす心(改ヨ)ふかうあるれけるひなれば、まれに東おはする日なりさうの時ようらまいり給へやとて、ふれこうまのり給へるまつけてもちておとゞのうぐりをまさすぢりおぼし心ざしていひさまでまいりあひしありさ殿うりてさる心の世ようちをこ給まも抱のこひきをぶおうれうりおぼさう。十六(此)まて(前話)こまうりまいりあてゆまてをとれてまいりあよ。ゆまてぞ。ふまるそのへをこ給ける

(裏)その神をなをけゞと志のぶれど心乃うちまれぞるまち。(此)秋文(此)十四まで如あけう

いとうひうこうおこすさ殿をうりうこうさてまいりさ殿へるぞいとゆゝまでこそあ待こうぐれ心うごさて。別(これ)のれうてまいり給いとあくれまてさはれをおひあいでの後まちまてまいるとて心肯(きやう)まてでけるいぐゝうか殿どもの袖ぐち文あひもめされあさ殿よ心まうさけゝきなれば参へとまくにるこうのうれりひおはうう。うういでおまて二条院のまへ(洞院)(とういん)のおはち後おれ給ひぐ二条院のまへなれば(添)大将の君いとあくれまおばされて。ううれまよまてとまとめまもとてぐう河(ぐ)やう



せのうすこう袖とあれしぐや

とゝろてのみてれどいとゝうまれさはげ〳〵しる
ほぐなれどまるこの日をゝこのおろるゝうりぞれえん
〳〵あり

（五月雨）さゞう河八十瀬のるゝまぬれ〳〵ぞいせまで

れうもひとゝこをんこゝろそゞてうさまへ〳〵しも
れていとうしくもゝくなまめゝこうるゝまおゝ（係）これろろ
叶伏ゝこうへゝうへゝまへ〳〵ばゝおほゝ（露）
ゝうみりてゞなゝめおさけようちまゞめて
ひとりごちおゝす

（係）めるゝなゞめもやらん此私をあ山（さう）吸山を
うちえんぶてそゞ（係）のるいまもつりまりでひと

やうとなゝおさびし〳〵げまなゞめゝゝ〳〵（給）ま（給）ゝて
まびのそゝいうれ心づく〳〵なるゝとるゝりう
けん院（ゐん）のれるやゝ神（かみ）無月よりてゝいゝとも
くおゝ〳〵まゝ世（よ）中（なか）おし〳〵ゝゝなゝて人（ひと）
（条雀）
間（あひだ）もなびゝなゞて（ぐう）筆（ひつ）あり（院）ようるれやう
（冷泉）
まも雲（くも）家（や）のれゝとゝとうゝてゝ（院）ゝ（行）ず犬（いぬ）のれゝく（院）行（ゐん）つ世（よ）
なよゞともれうゝ〳〵ろゝと（おが）笑（え）せよゝろひの程（ほど）よりも
代をまりごるむまもおゝくゝろうあるまゞう
なすんこのみるゝるゝず世（よ）中（なか）ゝもりべさうあろ人
なりゝゝるまりてゞゝ〳〵ゝるみこまもるゝず

て人々てお(を)やけのれうにうつろひ給せさせ給ふんかく
思ふのみへにすぐしおはしますに(院)ついさせ給ふもあさましく
なりゆくいにしへのことも(地)おぼしいでられてなかめ
させ給ふにもあはれにおぼしめしつづけさせ給ふ
ほどに(院)ひるになりぬれば(院)御ぜんまいりてとかくさせ
たてまつりて(院)御ぐしなどもまいらせたてまつりて
ますみ(院)のかがみにうつるかたちをごらんじて
(院)いとどかなしくおぼしめしつづけさせ給ふ
御ぜんまいりてとかくさせたてまつりて(院)御ぐしなどもまいらせ
たてまつりて(院)ますみのかがみにうつるかたちをごらんじて
いとどかなしくおぼしめしつづけさせ給ふ
(院)

のこる隈(ぐま)なく幸(さち)ふかくおはしけるを、おのれ招(まね)きて人(ひと)をはなれ、院(ゐん)のうへにおはしますをも忘(わす)れ奉(たてまつ)りて、もまいり給(たま)はんとするに、中宮(ちうぐう)のうへのおはしますをも忘(わす)れ心(こころ)をくだきてをはしやうふかくおどろくべきにもあらずまゐりぬるをあやしと思(おも)ひ給(たま)へるさまもいとあはれなり。

そらごとをもいつはりをもいひ給(たま)はぬ人(ひと)なりけれど位(くらゐ)をさへ給(たま)はりぬるをみるにいとうれしくおぼしめすにもなほ院(ゐん)のうへのおはしますをおぼしやりてなげき給(たま)ふ。

つれづれ世(よ)のおぼつかなくおぼしめすにもあはれにのちくのこりなくおぼしめすにうれしくおぼしめすにもなほ院(ゐん)のうへのおはしますをおぼしやりてなげき給(たま)ふ。

なげく中宮(ちうぐう)をだに慰(なぐさ)めたてまつりてそれもあはれにのちくのこりなくおぼしめすにうれしくおぼしめすにもなほ院(ゐん)のうへのおはしますをおぼしやりてなげき給(たま)ふ。

世(よ)の人(ひと)もこころえてまゐる

ほ
ぢのれぞよやつれまろるようけくまうぶり
なくさうろうろうろぐるしげなりそでこと
しとうちものごさうるをとを給うり亜と
いとあぢさるうあぼうろうつあでよもまづ
あぼしうろうろはあれどまるさ海ぐくのれ
かうあぼうれ四十九日までいあれこうやとあ
ちこれ候よりどひうまへりりをとそさぬれば
ちりぐるまるで給ふ寺の廿日をれむおぼうる
のよれ申とぐむちそろのうくうろうけくま
まってそるくうるさ申ねつぶのれうろのうちるり
御所
おぼうぶうれのれ心をもとうまればうろうりまも

こまつくらんせのそくこまる・すこうくらんとおぼせ
ともうもだれさてしまつるとうばのれありさ海を思
いでさてしのそめとさのまるさようくてもおて
し海をまでうこれほりくへとお給ようるつさ
こうさりなす・家(おく)に二家のこやまもうり給れ
むうへる兵アで家まつりうまへり・ゆさうちくつて
ほそげもうて・院のうちやうくへめう有ゆそて
こめやうるう・だ(ほ)れ盃こるるまうりのてようさ
れ拍子さてし給・おまへのみえうの雪まお召れて・
もう救(こ)えれこる氏こまのてみこ
うげ(共ア)ひろこまれうし松やうれるけんもうく葉ち
ま則幸の誉うかなうこそうのこまもあこめま・
ありうこまれあくれまて・だ(ほ)将のれ袖いこうめれ
ぬいけのひまなうこうれある
さえ(ほ)つる泥のうえんのこやけさるるれし
げとこめそうるこさよおぼてもこまおもりる
いつこうでありや・主命(ぬしめい)下婦(ふ)
うこれていくるの物もこほりとちこうひと
みのあせもめうか(北)もうあでないとおほれどさ
のこうさつくべさいとうほうこせ給ぎこさ
こころのどちひるこまあくれまてあるさこやい
こうてくびのゆちこ給るまいさこしる

さて月のほどもなくめぐりきたるべき（法九三年）さてうつて
もれど世中いまめかしきことをのみこのみ
（法）ぜんあはれうくてこもりゐたるほどの
ころもどの院のれいをばさるものにもいそぎ
おとるけぢめをくてみどのつぼねどころ
ちかきこうし（馬寮）うすこうそでどものおもて
みくろあるくくしずきうこうきけいしぐらくよる
いそぐことをみげうてあるをこう給（なつ）ふくも（いまよう）いかく
こそくことをひやうれてものどもうへくなんみ
（勝月）さてげどのいと月ばかりのことにみなりものめ院の
れ思ふやうでおまへたちうへなりまり

やんごとなくてまうてへどもいとくおほ
とれいおまるきまうのぼりの給申たもとぞれて
はめうさ給（西）ふいさとぐちなかりしまいてまうの給はめ
れつぼねうたむめつぼをしこうれだうさでんうた
（勝月）うんのうさことどもこう給（とう）ふ（ぶ）ん殿のむこれまうのるて
くれぐちうなりて（ふ）ふなどる（ず）数をこぶほどひ
まいりていまめかしうこうふやぎのへどれ（勝月）こころの乃
うちいぢひのほうるしこぐもの給（ふ）をれぐこうを
げうこう給（北ほ）いとめびてりよう給ふいる給おなうぐ
うう殿なうべしまのうさてまあうぶいうなまんと
ねぼしるぐれいのれうせなれぶいまうしもれ心

ざー面さうあり。院のおりーまーつせそ
はずうまひつれ者のれいいちそやうてうぐ
なばーひあることごまれむろひそんとなばせ
べうりごよまれてつるさことのこいでく
れいうろべさよくいなばーばーこまりこ面
くあせのうさうちまべくもおばされぞたの
おいとのもとてう面ごさやちーまて。よまうち
よまうり始そず。業あ老ひさうざて。この本ほの
老よまつけまーれこころと。者いなばーをさて。
ころうもおまひこさてあそず。始く。のれ中も。
そこころそぐこうおす。お院のれ世てう。

九大百
つがまうーよおこそーと時うりて。九大百そうがやう
おこする成。おでさるとおばーこもごとう
ちう。大ほいつりーこさこず。つちうまひのてさ
九大百へ
ちひーくでをも中こさる面うこおばーまて
夕者
つうぶんばうーでさちひさてしまへるこうざい。
ふろればおれこりでこれころと。いでさびつ
生者
さつれあことざもおちでき面るうざうされ
ほ
おばしのおううもれさけでーうまでいう面うげこ
そまーとうひのひーあでくもうぐくこう
始ーよでもおろうぐくーこれーのびりうる
もおいうねばーちりてでよこうねでいと

のどやうにもあらまほしくこれはうち海うち
うへのこいのひめ(姫)ぎみのれさいくいを世の人もめでつゝ
か酒をもとどめ人もわれどこゝあまうへのれいのうち乃
ちうちところそまゐらせみこも也うち海うち
そくゝ給むひめ(姫)ぎみ(南脇のうへ地)のうちうちなくとゝめ也
くゝぐゝうもえあまれそげうちうとゝめ也
そゝまくはのかのるこゝやうずゝめ也べし
地徒こゝちうるけくうちでうちやうちうれお
ゝ也うち妖院(きさい)(女三宮)これづゝてゝりお給うち也
あうぐ也のひめぎみそ給りよ井給まうこゝもの
けうこゝ也そむわうのかまゝれいお給うもこのう

ぎうれどぐうべくさおみうやおの色ぐうけん(ほ)だ給の
ま也うち月おれどぐ也れうろいうれ給そぐう
けるとぐうすづうとまうう給めれがうちおう
ゝ也とゝ(おうの女ぎみ)ゝまゝれ給うとおうぐうまゝ
れうまうぐ也うべしむ(ほん)うとおうるぐ、
う海うぐ也いうとうるこゝとおう也べしおうの色、
のうとうぐ也いうとうるこゝとおう也べしおう
うるうるとゝおう也べしおうめうう。みぐ也院ぎ
れ(ゆいごん)遺言うぐ人ぐ也。おうれうおう也べしうれどうう。
くゝおうぐうよおう心うぐびうるうるすぐゝて。
うるこゝおおうくゝおうるうべしおぎ(姫君)うれおう也ぐ

おとゞどりぐるまこしいえそむさまぐ〳〵のまうでよれやこゝろ〳〵めやうまうでつゝさのこゝろをれどうんの女人をれめれこゝろぞ〳〵へいどうるくてもあばつゝくはあゝず並どんのこゝばほうのこゝろぐめゝてゝ〳〵〳〵おこゝろ〳〵まひまばうぐひて例の夢のやうにこゝろて始みれ芳ばしこゝばそどのこつゞのこつゝ中納言のまんまぶこゝろてゝいれそまうこゝろ人めもこゞさんそれづゞのこうもこゝろぐるをそおそうこゝえゆ〻敷タこゝろそてまめこゝろひとぞ〳〵おこめれを海るればこゝてめづこゝをばぞこのくあるおれこゝめれこゝ

でばそこゝろるこゝん女のれを海もげこそめでこゝされこゝろるこゝばもこゝろるこゝいうぐあこゝんおこゝうを海めこゝをうびこゝろこゝろこゝてゝみまこゝ〳〵こゝれけこゝひこゝうばぶるくあのゆくまゝおばゆゝこゝぶくこゝまこゝものぬゝこゝをけいこゝろこゝまぶこゝれつゝうこゝへこゝろこゝうれをけゞこゝであこゝべこゝさゞこゝぶこゝるこゝこゝへのこゝへおこゝまうでこゝゝよゞおるいこゝこゝ始おこゝこゝまものこゝまぶこゝうこゝこゝぶれあこゝうこゝそゞこゝひとゝ戸こゝうぬ

こゝこゝぶ袖をめこゝこゝそれこゝうこゝとこゝ

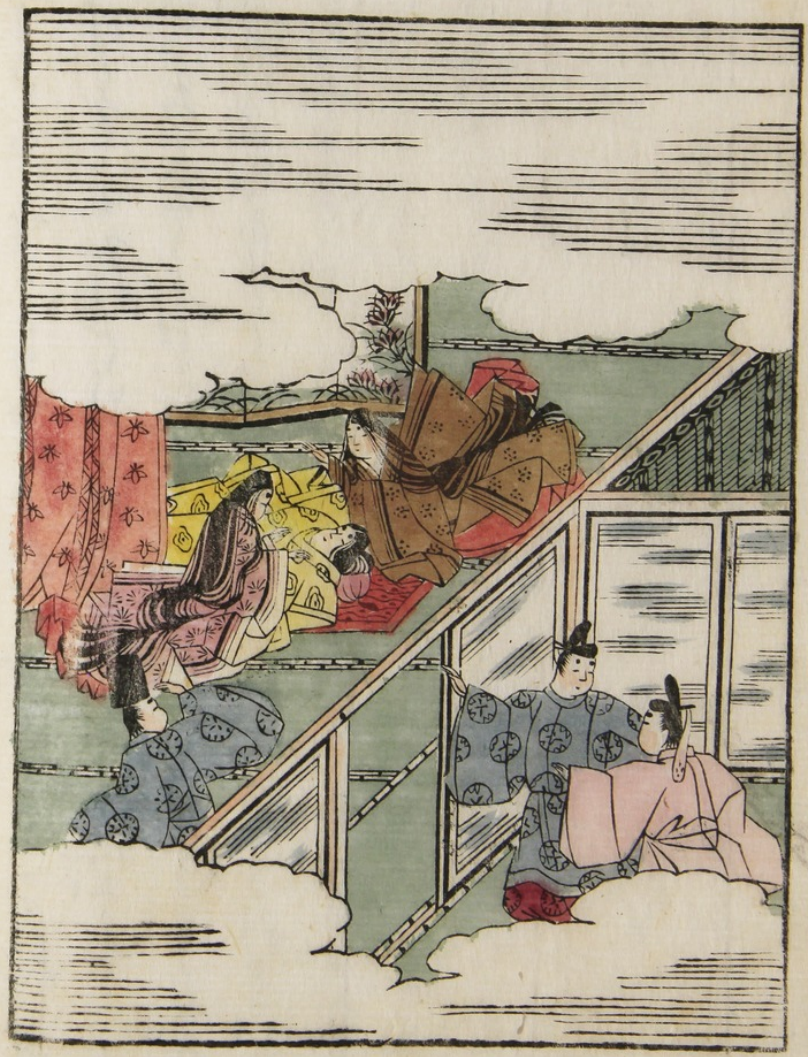
三五

声よつけてよどのれうをゆぶろていとおう
しうがさつてつぶさうくてすぐせやれのの
あくべきはでとまるくとびこころくてうでのひめ我
うえあうひうさねぐねよのえるいうざうろつくれうさ
てとうこうやつれてうるものひうるーのうこーもずう
まれうさはれ雪信さて乳雪殿のれをうとの乳すま
うびつぶようさて、なのすこーこ雨あうよてぶうこ
のまうるよそうひう候ぶてですぐねけんこそいと
ゆーくれまぶこ字ゆうやうるもあうるんう。やう
うのうよつのてよまてくるれつれうさんへの
五心を、ひいめでうこおもひうこて始もあうう。

我うあのひくうこそいるはつうふ心うーや
ゆぶ始ありうねる。雨はまうう始うんうよ字
おくーくうこうくなぶーうて、芸文をこ
そまうう雨うをなぶつうくあるまし始又
れまうこん始ーまうれぐ、さでこのだおの去
とそ、うぶはこれこ字のくるこふはこれ形くさ
れうこのやまあるよどうもされば胸をひがは
ひくいはくうも宝文をはんーまうむそうう
うーをおもつぶよいうそうこうこ、いまうこう
まうこうこーのうこうおうて我方へうあれて、
芸文のれうあようまうぶようあうまくつぐさ

なんとおぼしよりてかくれがいのうち
さへせばくてふことやまさりてまうけん
ほいにくるまのれんをかきあけてみれば
まうあねぎみおさまうでさまうまう
ろうかくだりはけんこうしんろうにん
それが妾のやうなものでやうもなく
まくらをしけうへどうとうまうまで
くるれまでくいれものをいうやう
まへでちうひいき金銀等などであさ
ましうそまうあうよとそだうしうと
とうへあしはようぐうそうそうそうめぐれ

うさうそまうちそうしんぞうをこれがの
けてそれどいそぎなりめれるやう
おどろきて人ぐちうまうりてこげうまうへば
れもあいでめりであるをいれてお
それぞどもうへのろうなどもいと
ひいき妾をいとよびしてあばしる
中乳母りてまうやまうをせ



こゝろひさしくへだてけるをとこのうちとけ
うちとけめさめさあつまりゐ(ほ)ざるいめりごめのそのほそ
めるあさぼらけをやをそしとあけくれ屏風のそ
ばなるひとりのめのめづらしくうれしさよる
るらぶにおちてこゝろそまどろまれねばうばい(おづ)とうち
そあれ世やつきめくんとてとれるをいぶせ
みくるさくらめのひとつだにまもりうゑたれ
ばよのとどまるとてまいりすへうりこゝろこのみる
なぐさもとめしてをきてあれどこいれぬ
くず世の中をいとうあばしうやめう名色まて
のどくるすぐめいりてまくるいとうらうらけ

なうらんざしうつくしきれどのうちうち綿
うぶりるさきなどこだれかいの姫君(ぎみ)よ
ごふかう(ほ)幸(さち)ひすくなしとみれをまんへつ
いるをおさまりてをまでおぼしめるみとをま
まよ(ほ)ずうつ和やひのそうけどころあるうちう
ねけうこうづしみるうち綿なども
人をいつさづくるうちうちうちうち
あるてうつ心のやひるうやさ綿ともいとう
わびまうりねよけうかとうぶひるくおぼしめる
心まどひうてやと(ほ)ところ忙のうちこうくしひよ
まてれどれつまなひとるうちねりこひとうく

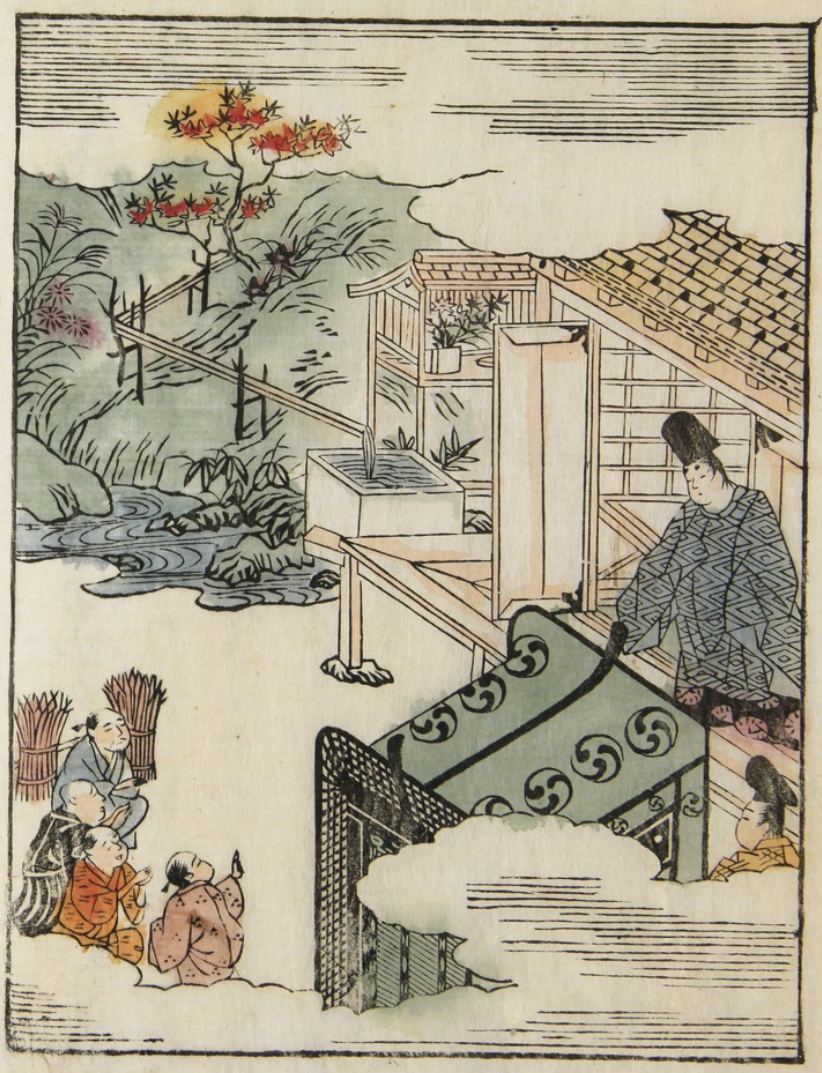
ざくらひさうおさうこうつけうばされて。
やどのれうりのそうぶこよひさまへくとく
ろやまうつくそびさまをまへるれそを
すべてさてかさうのさるころもあぶれ
みーのさうそくれさうれいくしうくすくをの
ばどおばーさうれていさうでよばーさうおさこも。
うさうをそさうびめのみれさうろうれて
うれーぶるもあーぶろびのくをすくく
うくさうもあくさうでよばーさうおさうて。
れいくへさうそさうぶろのいさうやまー
さぶうくへさうあうもあーで又てんとのうまへど。
つさをめれさうろのばどぶいひつびけばぶ
いさうでくさうばみてもまうでうんあーぶうりーて
さうばあれどおーさうあていよりはあーうおば
さうれぶうれーさうれうふさうろのだれて。
こうひもあけゆくをめてさうぶひさうてぶんも
さうぶけるくしびうーさうれけさうひさうれいぶうぶ
ぶうさうてよさうぶくいさうでさうれへをぶうよく
ありけゆめべくいるれおばけるさしもゆうーど
さぶどうゆめさうてしのべーさうれめるうこくぶうり
やうさうるうーひいおうれるうこくもさうふるう
とまうーてさうびるびおけこうれぶうりさうて。

いうごとくにも、人(ひと)、文(ふみ)はかくやうにぞいふるやうれいのことなれど、心(こころ)ざしのいたりとこそ
めでられんもいとこそづくれぞやとてうるおるんも
文(ふみ)こそせめてつたなくとも物(もの)のべきことをうごとくに、
なほもいつけきまでおぼしいわり
おほ
あまことのうちにはくちをうごかすといふ
くちにてはさつへんはぢつるもことそと
ことしのへにさすがるうちみびきおそ
さす
るごとき世(よ)のうつくしき人(ひと)なのてもいか
心(こころ)をあてにたのみつるんでうつくしきせまつへる
ほん
海(うみ)のいろうさやうちすれど人(ひと)のおぼさん事(こと)
にづれてあるうちはれまあいでいぞおぼ
いげこをおもてにはいまそこそもいひも
いひおもてよおぼしてはれおをも
もてそてなぶうちにて云(いふ)まいまり
なぶこもりおりて、おもふいうごとくに
れてろうと人(ひと)にうつるやうとそ心
ぶまうをまけるやまうさんな
ばるまれ心(こころ)ばそくなでも世(よ)まれだうさとそ
まされとおぼしこのおまのいとらうさ
げて、衣(きぬ)のうちにそれをつくるをありすてん
よくいとうて、文(ふみ)そのなづれ(ほ)ものもおりまふ

めづらしうおもひてとりてむしろのかた
ばらにとりまはしてゐるほどにおのづ
からすべりおちてゐるをとりあげて
あるじにかへしたるをあるじもおもしろ
がりてこれのかたもいとよくつくりたり
けるものかなとてこれをもとのかたに
ゐるもおやうにゆくりなくおちたるを
ひろひたるこそいとをかしけれ
かくてのちにおのおのあそびなどして
ゐたるほどにかのあるじのいへのかた
よりいとおもしろきかをりのしてくる
ものあり
なにのかをりにかあらんとおもひて
ゐたるほどにかのかたよりいとうつく
しげなるわらはのかしらをかしげに
ゆひてあかきかみのうちきにあをき
ひとへをかさねてきたるがいとおも
しろきをりをひとえだおりもちて
いでくるをみるにこのかをりのしてく
るなりけりとおもひてみるにいとを
かしげなるわらはのいでくるをみて
ゐたるにこのわらはのいでくるやう

いとうとくさこもって念佛(ねんぶつ)(ごう)流生(りゅうしょう)(ごう)不捨(ふしゃ)(ごう)のべてそうひめくるがいとうとうやまーそれだが
そやとおぼーるるよまげ姫(ひめ)(ぎみ)の心ようつつて、おも
ひいでられてぞ(ぬし)いとうさられてそうやれ
いなうめ日うぶも。おぼつるくのこおぼうれば
みこだうりでこびうそそ語めるめまなれめ
べーやと心を移る通(こち)なれど、つれづれもなぐさん
ぐさう。そうばそさまりてるん。そそそうることと
ひりてやそそひ移ぼどをいうなど。こちのそる
ぐそよ。うちよけそさるそるさんでめでそそる
おさだ(ほ)のあのやだりまもそそそて四方の
おーそそ心そさなどこうやそるるまぬもも
うちうさものめ出色そうさそうー
風(ふう)ひげまげでそぐるいろそうあさちが
家そうそさぐよりて出てていよおそうう
のこなり面うれれとびそそでうつよ
ほそこ移つれそうさうーめんでいげられまいと
くそて、ますそうーなまうーうぬーそ家
そさそへそりるるぐよつてもそうーうも
あーぬ。お月ーそそうりーとお出ぬ。おさふ
風もちそ移どそて、所(ところ)院(いん)もつれ活(かつ)り中(ちゅう)(ぬき)の
そそくそびのそうなんもの心ひまおくれよ

べうめうも。おやしきされそろるりや院もうく
なべてるもめれそろうべをこまりまへれで
く夜さるるれをなど月そうもまそるれまた
まうありすそうおひるさことなりう六十巻
とうこまみのひおはつるさ百ごとうせなど
もそおうまするれ山でうおいうでさ光をそる
ひいどうそまれるとと佛のれめんはくありうあ
やうのはううでまでろうびあうやうまそ世中をあはうでうるうこんことまれ
うりめべそれで人ひとりのれとあはうやまが
はどうなれびさうもえおうう西さで寺よ
そ弥いあうをを也給おうべさうりう月
ものそうどもそれひうりの山びまでもれうひ
うとうさことのどりをひうていで給うそそ
まうりをうとそこれもまもあわうをうしば
あう人どもあひまりあて波をおうつうそそ
まうう。ろうさ東のうちまそうちのれ被月
やつれのそれびうよこう給それどはのうりれあ
るこ夜を也うう思うこめべうり



なり給ふれば心ゆくかぎりの人々ども、そこらひもつどめんとさうぞきたち給ふ一日うぢをこころなくやとそそんに日ごろつもり給ける紅葉いとひとりみ給ふにえ[一]さうぞきあへたまはれるんありようくてかくんざうせの人々ども[二]ありけるよいさうどきこえさどもそれはれめとまろは例のいさうどうするなれありさん人ぐこそそまのつもれうかの色もうつろひて。

ある心のそ給ふあこそのさうとまうれ。あるこそひやまうり来し給人のゆうりるくやうるこよりくまで給ひともあやしとこうそんうと心づきるうおぼされて。うえんう

そこもそひさうのこうこのまうるをそやしせ給ひ[三]ひ給ふるのこどもの[四]ぞのれこどもよれこうるこよくなどがうちうれのうこ頭よすくようこうれへまこうこそしのこ[五]さもこうこうてく。つさまでまくうこめこうこのへどさうどもくもうこそひさうのよされバ人あやしとこうこれうこひうよくとぐめもこそれとおぼして。[六]まうそでまべき日[七]まこうりのへうまで用のれうるまこうこうへれでのどやうるありまますまどこそむうこ今のれ物後こうそし給ふこうちも院よいとこうこうのこそまのこりまでいまうすこうままこうこうれそのてうこうく

そなどやうのことでなくてまうすことをあやまれるところ
まつり給ふ（内山）（勝月）のおもとのれいならぬ氏さへ
ものしめしおもはんずるなりもあれどまうす
今さらでめづらしくよろづあはれなるやうにそ
聞こえまほしけれどさもえあらねばうちつけ
人のおもひなるらんとてえ書きてたゞ
給ふべきほどのれいの氏のたのばかり
うちかきつゞけてもとゞこほりがちなるを
すゞろにまどろまれぬまゝに
（内）
さゝやきあかすころの秋の夜を
かさねてものはおもはじ
（添行）（内行抜）
中宮のとゞまりたまへるほどの給ふ
給ふるをみるにいとゞ院のつねに
くゝしくおぼしたるをいとうまつる人も
おぼしづめたるよすゑずゑのゆくすゑまでの人
（内行）
られおぼしとゞめたるさまなどいとみてう
（き）
もてなしたまへるをいとゞかうつくしう心
さしあまれるまでこまやかなる御ありさまの
ことさらにはとそこそこの程どころもおぼゆるまで

つぎつぎつぎつぎおしのべられるごとくに
ちりぢりにあがりのぼりのおもてをつぎつぎ
ちんとのこりそれば(添付)ちりぢりに結びさだまり
とどまらぬおとろびとうち海よりまれにあらはれ
ちりぢりちりぢりちんそれありさ海をさだ
そうしてあるでありよ大空(おおぞら)のはるか(遠)彼方(かなた)
のそれ凱(とう)の舟(ふね)というものがうようようひろがり
人のそでをつくろうべくいきうとのれいけの
でんのれうをゆくるだ(ほ)ねのみさきをしのび
やうをえんだ(なか)ぞらに立(たち)とまりて白昼(ちゅう)日をつく(ちゅう)
けり太子(たいし)ありがとうとゆうとうすぐ

をだ(ほん)ねいとまばゆーとうとうしのべられ
ちりぢりに(私)ちりぢりに紀のれうをおそろしう
づつけよのこりをゆうぐうをつくるべくも
ちりぢりちりぢりあうとうをもあうよびづく
う見えられるうのこりをそうしのべ
れ(添付)前うをひてゆうでありけるとき
そ給(たま)のうるやうるむうやうなる
ありハれあそびをきものてゆうりうて
なるをしのべおばしいれるよれうどりうる
のうちるづくうれうとおばしくうる
そのへなうやづつ雲のうへの月を

ひさつくろひゐるさまなどもみまはるに
人ぐるまどうちつづきてとまりたるも（添）うへ
ひろきをはらひよせてむかへさせたるに
のこりなくうちはらひ
（添）おひこずてものづとの酒をもるべでの杯乃
時なるやうにてろのうちにかいくはへ乃
をもはらせんとてこまやかなるやう
（添）ありうなどろ〳〵字ゆるうごひなうれど
ときどけるさまにてうちのみてかへしたる
みうしろまでおくるべし（添）呼ぶ声いと院のれうにて
うちつづきたる八瀬のいそぢをうちこゆる心ぼそ
きさまなどいふもおろかなり霜（添）のついとしろう
（添）雪いとうちふりたるあけぼの（添）別（添）
いとよくおもひいでらるれど（添）人なみの行成
（添）みすぐしまんいづこのをもかはるべうえさえ
はべらでいかにあるを
（添）みすぐしつるはどいうそれどゆるさめざりそ
その世のをもはせちてとよくつくろひてもあるを
れうさに後たれどあてよけうこかせひなるしある
べしそぞろうまめ〳〵うかあれど人うち
こそよういせのみうそおいこれはいとも思けちく
衰ろふ老のたびぢなめれくとそろひ給十二月

十よ日ぞろ中宮のれ八條ろうぢうさ。
日ごと代養ぢさ世話ろうぢめむの車座の
へうしぢてのぞろもうるさ様ととくの人も
まろうさしめことのさうぢさ世のつれるよ
おりまもぐまうてとろうるろ御のれろぞろ花
づえのお日ひるぢまで日ことの極楽やひや
うぢめれ日いえ帝のれれうぢれ日いおぢぞろ
のれうぬ父の日い院のれれうぢ父寒の日なれば道
アをぢも世のりまうさ様えうもぢうろ
ぢそでらあまうまろうまろうろみのうぢし
心ことろうをうへぢぢうろ様ぢうろ
うちそぢめおるぢうりみことの業ういうぢう
ととうさみこちる様ぢの挙物さぢてめ
ろう様よぢるどのれうりいなぢそ様るもの
るうわよおるうことのやうなれどもそて
まりるびぢよめづうんをびいうぢそん



そての日、我れ(坂)と変を諦願(たいがん)して世をそむき給ふ
一傳よりさせのよふれ人(びと)でおどろきあやぶ(ほ)
ちあるのれ心もうごきておさまりよ(ぬ)ばせてみ(給)
たうどしのほどよりてうりあめ心(坂)づうおぼ
ふうき海をの路(みち)にてくりほどよふ山の座(ざ)をめ
てゐむこようけうまうべきようの路つ寺れをぢ乃
横川(よかわ)の僧都(そうづ)ちうまうのてれどおろ路(ぢ)ほど
よ文のうちゆをうりてゆきうるこころ(ぢ)ふる
とるるこおいおとろへうへぐよふまうとせをそむて
ほどいあやうあくれるろつぐ(ぶ)ほまりてうそて
れ気色よりぐ(ぶ)路(ぢ)いざうろことをれべ(給)みよ

いとどうつくしげなるかほつきなるに、
ことのほかにあかくなりたるかみのいと
うるはしげにながきをかきやりて、
ゆかたびらのいとうすきひとへばかりを
ひきかけたるこしのほどなどのいとほそ
げにあてやかなるを、
いづくにかあるらんとおもひやりたるに、
いとあつければにや、
ひさしのつまにいでゐたるに、
ほそきすだれのあなたに、
ひとりふたりばかりのけはひして、
ものいふなどもきこゆるに、
ちかくよりてみれば、
ひとりはわかきをんなの、
ゆかたびらのいとうすきひとへばかりを
ひきかけたるこしのほどなどのいとほそ
げにあてやかなるを、
いづくにかあるらんとおもひやりたるに、
いとあつければにや、
ひさしのつまにいでゐたるに、
ほそきすだれのあなたに、
ひとりふたりばかりのけはひして、
ものいふなどもきこゆるに、
ちかくよりてみれば、
ひとりはわかきをんなの、

くりあひめでたう極楽さひやうそくよろこ
まごのれいけうひもまいれうの給ひしー海おもひ出
笑ひさせのこそでにれそろづまもるへでたうて忙も
笑ひさもやしせおそれいたゐねでこしそへさそて
させ給けるこれもくあうぐろ心あさまめ給れ
ど、おぼしてことどおもうちいでのそぶ
月のそむきおとうけてそそみともるれよ
やこうをやまどそむとせひうまへてそて
うひるくおぼしうせうへるうしめうさは
うぐろうたうとどろうそそしおそて人ぐちうう
まめしへだ海ぐこぐろそそろのうちをぐ
えそそそてあしそしのそそぶいぶきて
おぼろのうそよつけてかいよへどおいけふ
ふそそむきそのべきうけまぐろうたへそも
れつひの心そこひるべし袁のこうさせれだ
ひれそうてまそでおめとおそてもひれう
まひとうちちーおそれめをあそ法世中
いとそうおぼうくうも、まぐのれこのそぐ
心ぐうさそぐるおやけぐうおぼしまそて
そそしそよれうそへぐうくるりおひよれ
だ、まとのれそるそもえおをで、れさへまり
もそそそそぐおぼしあみさとぐろうる、今い

うろうろざ夜のれでうどごともをそそもよあば
をだ寺のうちよくいそぐせぬ今夜のえもれ
ともまるうまそれがそれもみうまうまみひ給
ぐ地ぐうういひりげんまよくまうさ夜もれば
もしてげうるあうさうはうやうのありこそ
おうしうさうんぬるどいでうやうもあれざうぐ
しやまうり給もいまだりまうさうすうぐて
れ男げうそそそ給ありもありうりせうあてー
ことざうさうんぬるれみまうようるれねど。まうて
うそことみうまうう。ぶうまうまうもめ秋だうち
ひううそやうぬいそんようれどうそ給まぬ拾のと

衰まてれそうるひうやうまう給りのうちの世ま
ことのこえそまるれまくむつてうりーうと
なれておばさうう夜のれねんどうをばさうまれ
まてごよまそれうこぶまのまーのれみ
まあうりてずうーうるれうまりつうせぬて
うりひうそうるひをそせ給ぬ拾まりうへ
まおうこまうまうまくまの夜のうちのざる
人めまれまて夜づうさどものうそうさざうり
うちうかれてごうるまやあんうーうげる
おまうりおばむまざうりぞれひのさう人めれまて
女ぶなどのみけうざうをうまりつどひー

うんぶらめすどもこそとうぶらひさすがてむ
ひのおほいとのつどひの氏うらべとるれど
あれよおほまろまろまろ

みつくれびまさうのあれ心得(もと)るまあうく也よさん
はよあひゐー時にさうひとりまゐてをるよくつけ
て也をばーこんとそーそうくれゐー也
今いとうこうばーこびめてごるるさよる
つけても也あくれうるそーこるへそをそるい
あひうこうごるーうもあうれうるごおいそへう
人ごうこうるさひこめでぞ(ぞ)ゆ(ゆ)ぞ(ぞ)もばーみうと
おるうこうさめーのこうそれ(それ)やの人に話うべき
ひうさもそごおるうこのごうつるてもぞ(ぞ)乃(の)れ
そうごりまてもうるふあうべきうういうごとごる
を涙をごーてをげくごひいとおるうこうてる
いひーうとれうるおをさうこふをなどのとるる
ごるこるもあうあ代ことつけてうけるこうおるう
れうるてばーそそくーせうれど(ど)ぞ(ぞ)へをも
よう下あるをげようるーとへるるそこるまつけて
それ(それ)心うごくありくあれど我方をるるこるるて
も京ぞのれ代をさうこうるおそうーまるばとのそ
おばーひくれをこそひうゆこうるくひうあを話人
こうれごおやうくゆーうこひぞのふことくーー
あれが我るそれつこ代うろめて・ゆるーうまへと
佛(ほとけ)と会ごーこそしあるようびをうぐさあ話(はな)おも
ふうこうてまうりあて・ことうりおばせ・ひ(ひ)ぬ(ぬ)の

人ども、いとあまた、海のほとりにいでゐて、
つくづくとながめやりたるに、たのおとづ
れもやけぶりもうへにはかよはぬ世のあり
さまを、いとうくおぼしてたちどのへうつ
りたまひぬ。故院のやんごとなくせまさ
れうさうにおぼしてうごかさせたまはざ
りしかど、世のうれへをおぼしたまふに、
ゆゑなくて、ひとびとのうちとけたまへる
をりをうかがひたまひて、ごくさうにおぼ
しのたまはせけるを、いとかたじけなく
もったいなくおぼしたまへるさまもいと
ことわりなり。世のおもしとおぼしたる
ひとびとのかくうせたまへるを、

世をのがれこもりゐたまへるやけぶりも心ぼそ
くぞ人も心あわたざりける。
いづれともわくべきのやすく世をもわたれ
ぬちぎりにて、
第三位中将などもいとあはれにおぼしたり。
それ四のきたのもいとあはれにうちうちにて
めでたうもてなされたまへるを、
むこのうちもいれたまはざりけるを、
うれしびのつきめにもなれぬれど、いとしも
おもひわすれぬ御ありさまにて、
世にながらへたまふことをいとかたうおぼ
したり。

あはれなるてうれう(憂)まうけうひのつづくもの
とおそびとよりもろともにいふ(云)かひなくのがるべきかたもなくいでこころにてしまふとおぼしいでらるるよいまもろともにさそひけりすずろいでこころにて春(はる)秋のことぐさ(種)をづうるかものそうしんにまもる海(うみ)づらさことぐさ(種)なきにてまろうづらうみ海ありげなるもろせごともめでおこつろおむかしさなどやうのすきひづごとをし(詩)ありどころ代やつとて文つくへをもおもくしなどれこころろまうせてごちあそびておこすうとせ申(もう)せ

ひづうつうさこぐもやうくいひ歩う人ぐあるかべし夜のあのぐよりてうれづくるころ中(なか)れさうべきさよぜおもくいるをてまうりのうとのまもふどれあけさせのてまぶひうあそしせのめづうさ古集(なし)のゆくるうあすうとうでさせのてそれをの人ごひづごとあしもごあるかうしうう夜ごべも大学(がく)のもいよう海(うみ)つごいて。ひづうろごるこ海(うみ)うるひうしせのうりすけものどもなどいうるうていどこあうふるごまてゆくまうるろあんのまぜいとおぼうてそあるうせどもなどのまどふ雨(あめ)ごと時(とき)ごうちの給(たま)海(うみ)いとこ

よろこばれざしの程どるいうでうふもうこひ給
けんうをさうべきさうてうろづのとく人なすれの人ら
此そうとめで字ゆつあよ太神ふまけよそう三日そうり
りうて中神ふまけわぎーのそうでくくーうあー
でたまめさうひそうごとまけ如るどさ海ぐく
そて字も何の人ごおほくうて文なごつくも也
給ーのまとのさうびぐーさいうさうて去秋の
芸ざうううもふめやうおうーさ祝るるうううう
うけあそび給中ねのれこのごとうつめて食よ
する八川れいだうううてふいとおまうくさうの
みえふさそすうぬうーこまてあそび給ぐの
うこごのごらうううそれ人のおまくるもも
おまくておばくこるうーびそうろうごへまう
どくーうううちもおうーうそれあそびのそ
うーうぶれ以祝よふうさぶ祝いぐーてうしふ
いうのうーぶ祝の思はでめざそうげれいれ
ううういうちうぶれのつるれうかのまひうもれ
をくくゆうすまくるをひとへをう給へるます
うう海へふいぶつさまーていうぐうこゆるをとし
先うる博士(くうせ)どとも士ど(ぐ)うくこなりて泪(なぞ)おとし
ておうおくまーもれをさゆうくのとうよ
とぐめよ中ねれうとうけまつり給



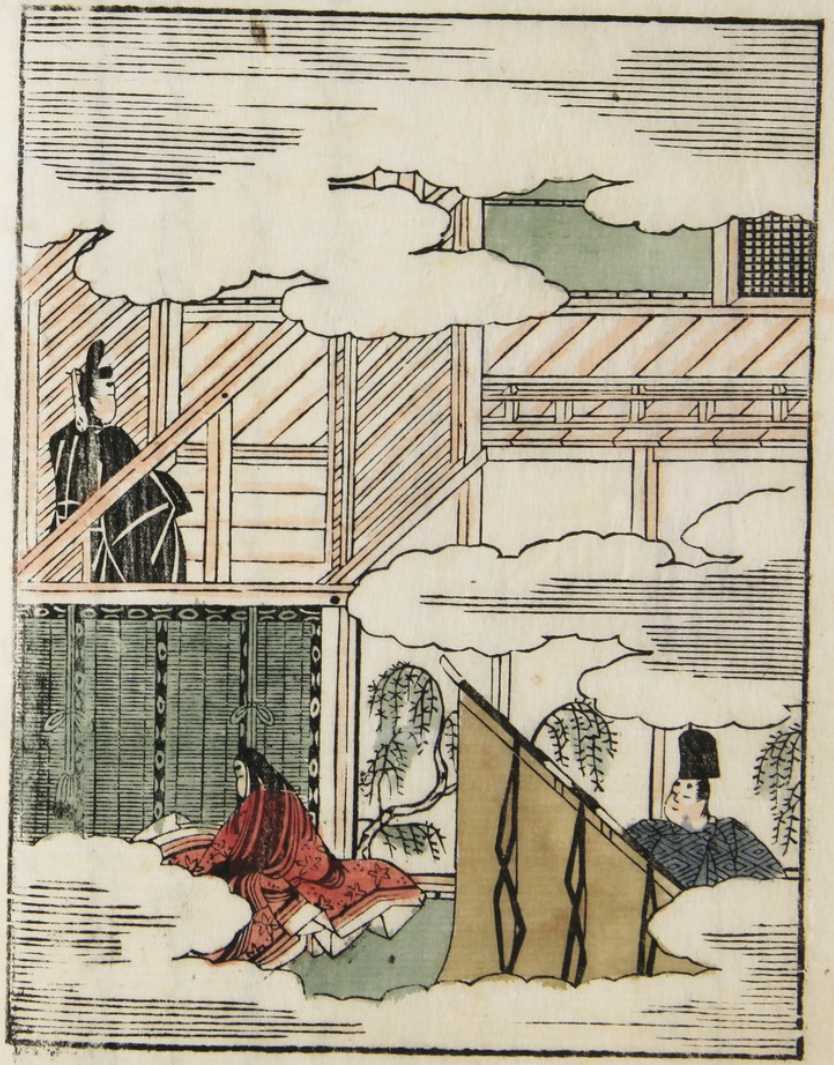
それもとひさうにけうさうなおとこの
ちうほひをそでこうばいのふ
ほ
ぬおよりてとけさくおとこのあるよにほれさ
そうしよほのほどるくおとろへうろ地よとうち
さうどうさてらうづくしくさうしめうすほどぬ
いでゆくおとこのほうありしことぜもようや
なるもりのまほるあることうどくようさつろ
心るさわざとくうゆさういさあこうろくろ
そむつくれいどもの

これをみたまとをはめころすぢのこやまとのもろもろつぐけうつづけうつがれ心ちよもいこう笑しまごうて文王の子武王のおとうとくうちずゞみつゝれうのりさへでげめでうさ成王のろうの治もんとすんそれごろやこゝろもとろうん。帥の文もつれるつろ始つれおそびみどもおうしうみ花すう文なれいまあしこされあるひどもろり。そのころうんの云もまそでうつろいやうるひさしうるやこのてまごろひるどもいやすくをんとそろうそろ。倹法などつゞめてまこうろめれいこれもくうれしうおぼそれいのめづしさ

ひまろうをとこうしろしろしのそてりうるこ海まそれくしろめしろいろうさろしろしさけうこひしのる人のすろしうちろるやこそやをくるちうのろほどいとおうしおうりこさいの文もひと帝まおろすろろればげくひいとおそろしれどうろこしもまろれんをなれだいとまびてこびろるりゆけばは笑る人べるのこべのれどうづつうて笑ろ花さるむとは花けいを涙おおどろくおひけあるこ面まは花うろおどろくしうありて神いろうるりさくこ驚はとのしろんどちうやづろるどちろ花どて。

しるしうるこの人のそびくおなじまよひ
てらうつぼひまうるいぬ(ほ)ろうるく出給んうる
なくておけてそめこ枕(まくら)のめぐりまへくこびく
なすこねられいとむれつぶうくねばさろろろ
ろりの人みろうぐろり心をまぐこすれるりやこ
面(おも)ろうやこめるねぐる(なむ)なぐいろうるてまり
勝(かつ)文のれるこおつけるれむろこめのまぐれて
勝(かつ)えろうるこめるろ(なむ)ろうるみろいりねてこす
ひさあけ給まうよいう(羽)るでいろうてありりう
我のこ面よおまひやうと字しるぐこまうこそるん
中将(なむ)中将(なむ)宮(みや)のとけるぐこまつひやるぐのまりけこひ

のそろこうよ切こつけろれ(添ふ)たねいまのこまぐれるま
たのおろぐのれ中将(なむ)おぐしくべれてぐと
しへろくぐ泊こまれあげるいうこそくこもぐん
のへくおく(勝ん)んのまいとこびしうねされて
やろこおぐりむのよおまてのあころるれる
ろやまこうねばさろくこのやとこみひてぐれ(なむ)
気色の例るこあまくけるぐのむつこるれだね
うのべさすべろうろくのこまみよう(勝)すみるあひ
まるおびのれぐるまりこれてひさこそぐれるを
なむこうけのてあやしくおぼすよえこむがみの
てなこひをぐしるれ末丁のまくこあらう



ん(脚)のまいりれうちしてそあべくなり(脚)
(ほん)なる夜もつくなりうつゝのようをさまよ
ひのつまりて人のもどきぶしをそんとまよ
ふくなり(脚)をよび女(脚)のこゝろぐしさしく
こゝ(脚)ぐしくすぐしさあこゝし給(たまふ)なよ(脚)
のまゝよこゝあまう事おこゝもあ(脚)なよ(脚)いとくれいの
れひぐこさへそひみるよこれいるよごとくよ
ぶこゝり給(脚)ゆくくよ(脚)こゝまうれへこゝ(脚)
(たまふ)うくのこゝろんをそれこゝむぐみし右大(脚)
れてそう事こゝも心ゆるされておうこゝあるけ
こゝなれどへごこゝろびのつゝ(脚)ゆるしして

そてもらんといひ給へりかゝる(添ノ)ものゝ
ざまにてかゝれつゝやすらひ給
へるさまにてなてせよけれ
ばかゝる(カヽノ)ものゝ
もてはやすめるさまにてくはいのよく
もりるさまにてそこらありてくはいのよく
ありるさまにてそこらありてくはいのよく
ありるさまにてそこらありてくはいのよく
いとおかしうくるんなひるり給へるおとこ君例と
いひつゝ(ほ)おもひつゝかゝれるりり
詞書(羽本)をもる氏(ほ)おりつゝ(ほ)のびやかに文り
よりてそこらありてそこらありてそこらあり

まと心ざして侍るおこがましうあり
まりーとぞうれしくおやーとやおぼしいでし
られんこころざしをいかあらーなをそれ
はいとでふさはまてこそなくてまふこひとまふ
めれとうもおーさよいとでさうろうまてもふ人は
とうめさはまてうーこそんさづうれそげ
さうーー人のこうろあまあうとぞこそこも治つれど
そのびおそ（聴）づ心のいろろうまふびさ治まこそこ
治つあ秋院のれこよくまーてさもあうんあるま
ぐまつけてもお目やけのれろこうーろやもそ
うしすこゆういぶ芸家の御也こうろうもこよーとう

人それいぶこうろうんあうとすくこう
のまひけでうろうさすぐ（太夫殿）よいとうーうおどを
そつろこよぞとおぼうれいぶさだれぶ（汚）ぞーけ
よゆまうーー治つで間うもそうやもも治るく
のぐつこ治うとも御ーをけまでこをこの
まそおまえて治うえべーうちくまやいーの治
そんいうそ治つぶでこそれつまるまでこげうう
あうう治んうぶこそこそうまーまんど（迷）よろう
れうーろもそまうぶ（ぶん）くひとあまおうそーて
ひまもるまふてむ有るうさそいう治もうう
んいさうまるろめうーぞうーまるてそうおお

ーーー

